

調査断章

雑踏にうずくまる野宿者の一滴の涙に気づかない社会(科)学にいったい何ができようか(『寄せ場労働者の生と死』1989年)。筆者は、かつてこう書いた。他者を批判する言葉は、自分に跳ね返る。筆者はその後、都市底辺を徘徊してきた。日雇労働者・下層外国人・野宿者、マニラのスクオッター(非正規居住地)・雑業労働者・ホームレス。かの問いは今も横にある。

調査には3つの問題がある。データをどう集めるか(方法の問題)、データをどう読むか(解釈の問題)、調査対象者とどう接するか(関係の問題)。ここはエッセイなので、その議論は行わない。その前に大事な問いがある。何のための調査か。問いは続く。何のための研究か。何を知りたいか。それはなぜか。そこで調査はどう役立つか。調査の度に、これらの問いへ回帰する。

調査は、現実を知る武器である。現実は、人間への非道に満ちている。非道は、しばしば隠蔽される。調査は、現実を分析し、非道を暴き、問題を発見する。発見は、変革への一歩である。知ることは、超えることである。筆者は不遜にも、現象学的社会学であれ何であれ、問題を見ていないと書いた(『社会学評論』33巻4号)。赤面の至りである。とはいえ、実際はどうなのか。調査は、非道を暴き、問題を発見したか。そして、超克(変革)の道を示したか。その問いは、私自身を問うている。

貧民病院。初期処置はするが、薬を買えない人は放置する。「集中治療」室で、痩せた少年が昏睡し、か弱い息をする。細い腕に点滴の針が刺さる。兄と姉が交代で、ゴム袋を絞って、喉元へ空気を送る。母が、紫の口元を拭う。父が、涙目で見つめる。次の日、筆者の援助で、人工呼吸器を装着する。息子の命が延びたと、父が喜ぶ。しかし、少年の額に汗の粒が滴り、手足がむくみ、腹に黄疸が出る。そして翌朝、少年は、静かに逝った。父が泣き、母が泣き、兄が泣き、姉が泣く。少年の骸に取り縋る。しかし、少年は帰らない。路上で生れた七歳の命が絶えた。少年は、どんな夢を奪われ、何を悔やんで、一人旅立ったのか。前日には、隣りのベッドの少年が逝った。そうではない。少年は殺された。そこは戦場である。夢を膨らませ、貧しさと戦った少年が、敵の銃弾に斃れた。可憐な命を誰が戦場へ送ったか。

今年7月の、マニラでの出来事である。過酷な現実に愕然とする。しかし、調査は逡巡しない。少年、父、母、兄、姉の声と表情と仕草を観察する。こみ上げる怒りを抑えて、冷徹に観察する。そして考える。なぜ少年は死んだ。なぜ少年は路上で生れた。なぜ家族は貧しい。どうして生き延びる。なぜ同類の人が多。問いが連なり、答えが重なる。そして現実の輪郭が、徐々に浮き上がる。とはいえ、現実超克の道はまだ遠い。・・・これが、筆者の調

査実感である。なぜ都市底辺の人々かと聞かれる。答えは明瞭である。都市底辺から都市が見える。世界が見える。懸命な生の人間が見える。悲嘆と喜びが見える。不幸と幸福が見える。これを固くいえば、構造と意味となろうか。調査は、構造と意味に分け入る。そして社会の非道を暴く。その人間的意味を捉える。そのまた意味を考える。調査はそのためにある。・・・そう念じつつも、耳元で声が囁く。お前に何ができたのか。人々に何が返せたのか。一瞬心が揺らいでは、思い直す。その連続である。調査は孤独である。それでも逃げない。調査を止めない。調査は邂逅である。魅入られる人、繋がりたい人がいる限り。そんな思いで、街を徘徊している。